

---

# 夏の魔法

真知

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の魔法

### 【Nコード】

N1931D

### 【作者名】

真知

### 【あらすじ】

あの夏、わたしは魔法にかかった。目の前の幸せに飛び付き、永遠の幸福を祈った。でも終わらない恋などなかったんだ…夢から覚めないシンデレラはいなかったんだ…

## プロローグ

『キスしねえ？』

それは突然だった。今まで何事もなく過ごしてきたのに、その一言で一瞬に魔法をかけられた。

一瞬の沈黙…。

時は刻々と流れるのに、あたしの思考回路はショートした。

『いいの？ほんとにいいの？今まで培ってきたものが全部水の泡になるよ？』

『いいんだよ。どうせその気がなかったわけじゃないだろう？いつもちよつとは期待してたんだろ？』

頭の中の天使と悪魔の対決は、しばらくののち、悪魔に軍配があがった。

『いいよ』

二人は幸せのまどろみに転がり落ちた。  
何も考えられなかった。

ただ、頭のずっと奥で、天使が叫んでいた。

『ほんとにそれでよかったの？』

天使の声を掻き消すように、わたしは無心で目の前の快樂に身を埋めた。

## 1話 明音の憂鬱

「いらっしゃいませ。こちらへどうぞ」

「ありがとうございます。またお越しくださいます」

様々な匂いが交差する店内を、ネズミのようにちょこまか駆け回る。どんなに忙しい日であっても、脂の浮き立つ顔を、1日に3度は整え、常に同じ顔で振る舞う。

口角のあがったその顔は、仮面なのではないかと思わせるほど、寸分の狂いもなく、今日も全ての客に注がれている。

あかね  
藤島明音は、飲食チェーン店のチーフマネージャーである。

この仕事もう長い。

いつの間にか時は過ぎ、今年で8年目。

『そりゃあ歳も取るわよねえ……』

休憩室の鏡の前で自分の顔をマジマジと見つめながら、明音は溜め息混じりに独りごちた。

こんなに自分の顔をちゃんと見たのは久しぶりではないだろうか。

仕事柄、化粧は毎日何度も直さなければならぬが、いつも忙しい中で休憩を取るため、飲むように食べ物を腹に流し込み、残った数分で、笑顔のキャンパスに忙しく色を重ねるだけなのである。顔の分析をしてる猶予など、数秒もなかった。

今日は休日にも関わらず、珍しく客足が悪かった。台風が近付いているせいだろう。外の様子は寂しげで、人の姿はほとんどない。

「今日はいよいよお客さんこないし、早くあがっていいわよ」

アルバイトの学生を数名帰し、店内はわたしと店長だけになった。

普段の仕事中はなかなか出来ないが、今日は客もいないんだ。

明音は休憩室に入って腰を下ろし、煙草に火をつけ、深い一服をする。

そんな時、たまたま鏡が目に入ったのだった。

映し出された顔は、昔とどこも変わっていないはずだったが、目尻にはうつすら笑い皺が出来ており、口角を持ち上げた時に出来る皺には化粧が溜っていた。ふっくらとした小さな顔は、化粧を重ねた分だけ年齢よりずっと歳を重ねているように見えた。

イマドキの25歳からは程遠く、『2児の母』といっても通用しそうなほど、疲れと貫禄に満ちた顔だった。

この現実はい、明音に相当なダメージを与えた。いつまでも若いまま、

昔と変わらないままだと思っていたのに、確実に月日は流れていることを実感したのだった。

もともと好きで始めた仕事ではなかった。ただ、大学生にしては時給がよかった。ただそれだけ。

大学入学のために田舎から出てきた明音は、アルバイト情報誌で見つけたこの店でアルバイトを始めた。

“時給900円”

危険な重労働ではなく、脱いだり触られたりしない仕事の中で、900円はなかなかいい。

「どうせバイトすんなら飲食店がいいなあ。なんか美味しいもの食べられるかもしれないし」

なんて考えていた明音には、まさにうってつけの仕事だった。

働いてみると、意外と性に合っていることがわかり、結構楽しかった。

つくり笑顔もいつの間にか板につき、愛想を振り撒くことを知った。文句を言って悪態をついてくる客にも、

「申し訳ありません」

と今にも泣き出しそうな表情で許しを乞い、その場を丸く収めることを覚えた。

「明音ちゃんがいるから今日も来たよー」  
と言ってくる常連客もいた。

その度に明音は、

「ありがとうございまゝす。また来て下さいねゝ」といつもの満面の笑みで応えた。

「明音ちゃん今日何時に終わるのー？デートしようよー」と誘いがかかる日も多かった。

その度に明音は、

「ありがとうございまゝす。でも今日は遅いからまたの機会にぜひ」  
と少し申し訳なさそうに微笑んで、その場をやり過ごした。

いつの間にやら、明音はその店の看板娘として人気が集まった。

田舎娘にしてはどこか垢抜けてはいたが、都会娘としてはどこか素朴な印象を漂わせた。

端正な顔立ちとまではいかないが、小さなふくらした顔に、粒羅な大きな瞳、そして目は常に水分を含んでうるうるしており、それはチワワに似ていた。

チワワ似は目だけではなく、後ろから抱きすくめたら折れてしまうのではないかと思われるほど、体は小さく、か細かった。

こう述べていると、

『なんて嫌味な女！女の敵は多かったはずだわ！』  
と思われるだろう。

でも違った。



明音は同性からの評価も高かった。

明音は、小さな細い体でよく働いた。

そしてよく気がつく子だった。

周りが大丈夫？と心配するくらいの重労働もなんなくこなし、いつも明るく元気な笑顔を振り撒いていた。

悩みなんてこれっぽっちもなさそうに、いつも、いつも同じ笑顔で、誰に対しても、同じように接した。

だから、明音は誰からも認められるその店の看板娘になったのだった。

いつの間にか週に6日は店にいた。そして活気づいた店に明かりを灯していた。

「明音ちゃんがいってくれないと店が回らないよ」

なんて言って、店は明音を必要としてくれた。

そんな毎日が楽しくて、嬉しくて、幸せで……

明音は“大学生”という肩書きに甘えた、フリーター人生を謳歌していた。

## 2話 明音の憂鬱2

店の看板娘として、誰からも必要とされていたあの頃　そんな大  
学時代の輝かしい栄光に、明音はしばらく思いを馳せていた。

アツツ！

ジリジリ音を立てた煙草は、いつの間にか指に熱が伝わるほど短く  
なっていた。明音は溜め息混じりに煙を吐きながら、煙草を揉み消  
した。

自然と、また鏡に目がいく……

なんてつまらない顔をしてるんだろ。  
なんて疲れきった顔をしてるんだろ。  
なんてくすぶった顔をしてるんだろ。  
なんて、惨めな顔をしてるんだろ。  
なんて悲しそうな顔なんだろ。

なんて、

なんて、

なんて、不幸を一切合切背負ったような顔をしてるんだろ……

「明音ちゃん、コーヒーいれたけど、飲むかい？」

休憩室に突如声がした。

ぼーっとしていた明音は、背後からの突然の呼び掛けに、やっと我に返った。

どのくらいそうしていたのか…

時計の針は20時半を指していた。

笑顔でカップを運ぶその男は、この店の店長。わたしの直々の上司だ。

「わあゝすみません！ありがとうございます」

さっきまでの陰鬱な表情を隠すように、いつもの笑顔でカップを受け取った。

「この天気じゃ、客はもうこなそうだな。今日は早く店閉めちゃお

つか。」

店長は笑顔でそう言うと、わたしの隣に腰を下ろした。

彼は、わたしがコーヒーを飲む姿を見届けながら、自分もコーヒーを煤る。

「ところで、明音ちゃんはいくつになった？」

わたしの笑顔の裏にある暗い影に気付いているように、彼は笑顔でそう尋ねた。

わたしは彼に自分の心を見透かされたような気分になり、恥ずかしいような、切ないような、なんだか辛い気持ちになった。

「25歳です。今年の冬で、26歳になっちゃいます。」

精一杯微笑みながら、そう答えた。

「そうかあ。もう明音ちゃんもいいお姉さんだなあ。」

「いいお姉さんだなんて…。もういいおばさんですよ。この店でも嫌われもののお局さまですもん。」

それは本当のことだ。

それは自分でもすっかり理解していた。

だけど、それをハッキリ口にすると、とてつもない切なさに駆られ、自分でもわかるほど、瞬時に笑顔が歪んだ。

泣くな！明音！

一人ならまだしも、

店長の前では絶対泣くな！

店長は、全てを理解しているようだった。

それはそうである。

7年前、わたしをこの店に採用してくれたのは彼。

わたしに店のマニュアルから接客のあれこれを教えてくれたのも彼。笑顔や身のこなし方、愛想の振り撒き方を身に付けさせてくれたのも彼。

わたしを必要としてくれ、わたしを正社員として迎え入れてくれたのも彼。……

7年もの長い年月、苦楽を共にし、店を盛り立ててきたのだ。

わたしと一回り歳の違う、温厚な、

「人の好い」という言葉がぴったりのこの男は、わたしの7年間の全てを知っていた。

だからこそ、わたしの心の闇にもずっと気付いてくれていたのだ。

「明音ちゃんのこと、わかってるやつは、もう俺しかいないんだもんなあ。俺にとっちゃあ、明音ちゃんは、いつまでも明るく元気な看板娘のまんまなんだけどなあ。」

感慨深げな表情で、彼は月日の流れを噛み締めていた。

そして、二人の間にだけ流れるその過去の年月を振り返り、彼は深い溜め息をついた。

店長のその溜め息には、

『この職場にひっぱちまって、ほんとごめんな……』  
そんな申し訳なさが溢れていた。

外は、まだ雨は降っていない。

ただ、今にも強い雨が降り出しそうな夜空の下を通り過ぎる人は、もういない。

「今日もお疲れ。また明日な。」

「はいっ。お先に失礼します。」

店長に笑顔で挨拶をし、明音は帰路につく。

台風はすぐそこまで来ていた。

遠くでゴロゴロという雷の低い音が聞こえる。

降り出す前に家に帰ろう

明音は、懸命に足取りを速めた。

だけど、先を急ぐ足の運びとは裏腹に、明音の心はそこになかった。  
そこにも、あそこにも、どこにも……。

あの日

あの瞬間

あの場所から

わたしの心は動き出せないでいた。

気付いていたが、わたしは足だけを前に前に動かした。  
決して振り返らず、戻ろうとせず……。

ふと思い出しそうになるときは、尚更足を速めた。

そうして、いたずらに、年月だけ流れていた。

でも無理だ。

今日は思い出さずにはいられない。

店長が変なこと言っから。

あの日と同じ、風の匂いがするから。

信吾………

雨が降り出した。

名前を呟いた明音に、容赦なく雨が降り注ぐ。

ただ、

今は、

今だけは、

とめどなくこぼれ落ちる涙を隠すには、とても都合のいい雨だった。



### 3話 明音の憂鬱3

雨脚は随分強くなってきた。時折黒い空に稲光が走り、雨音の合間から低い雷鳴が響く。

明音は重い足どりで家に辿り着いた。

店から2キロ先のマンションは通勤には多少不便だが、近くにスーパーやコンビニがあり、レンタルビデオ屋も徒歩5分。生活に必要なものは、近所で全て事足りる。

大学の頃から住み始めたマイホーム。もう8年になる。5階の501号室は、もちろんいつも真っ暗で、明音の帰りを静かに待っている。

鍵を開けると、いつもと変わらない暗い静寂に、廊下の光が射しこんだ。

「ただいま…」

誰もいない部屋に向かって、明音は呟いた。

明音は靴を脱ぎ、部屋に入った。

外の雨音と、吹き付ける風でガタガタ震えるベランダの音だけの部屋で、明音は電気もつけずにソファに寝そべった。

8年も経つ部屋は、色んなもので溢れかえっている。昔は

「まだ若いのに家庭的な家」とよく言われた部屋も、仕事に追われた日々の中で、いつの間にか手の施しようもないほど散乱し、泥棒

が入ってもわからないほどである。

部屋には、去年昔からの友達が一度来たきり。あとは新聞の勧誘や宅急便のおじさんが来るくらい。

誰も人が来ない家なのだから片付ける必要がないのである。

部屋の暗さと静寂は、いつもと少しも変わらないのに、今日はいっ  
になく明音の心を強く締めつけた。

「信吾……かあ……。」

さつき帰り道でうつかり呟いてしまった

「信吾」という言葉によって、今まで封印していたはずの想いがこ  
みあげてきた。

今何してるのかな。

思い立った明音は、鞆の中から徐に携帯を取り出し、画面を開いた。  
暗闇に白い明るい光が明音の手から浮かび上がる。

番号もメールアドレスも残っている。誕生日も住所も全て3年前の  
そのまま。彼だけ変えてあった着信音は、もちろん当時流行った歌  
のままで、今では懐かしい歌特集なんかで耳にするものである。

その着信音は、もうあの日から鳴ることはない。

わたしが別れを告げたあの日から、もう決して鳴らない音である。

明音はメール送信画面を開き、彼のメールアドレスを入力した。

そして、件名に

「久しぶり」と打ったところで明音は思い止まり、携帯を閉じ、壁に向かって投げつけた。

もう忘れよう。

#### 4話 身辺整理

昨日までの嵐が嘘のように、カーテンの隙間から朝の日射しが部屋を照らし始めている。外では嵐の去った晴天を喜ぶかのようにすずめがチュンチュン歌っている。

いつの間に寝てしまったのだろうか…。

仕事の制服、化粧もそのまま、ソファに丸まって寝てしまっていた明音は、寝ぼけ眼で時計を見た。

6時。

明音の起床は6時と決まっていた。職業病というのだろうか、どんなに夜遅くまで飲んでいても、疲れていても、次の日が休みであっても、目覚ましなしで6時に目が覚めてしまう体になってしまっているのである。

開店業務があるため、大抵8時には店に行かなければならない。

毎日の朝の2時間は、30分ボーツとし、1時間で身支度と軽い朝食をとり、残りの30分で店に向かうのである。だいたい自転車を使うのだが、天気が悪くない日は歩いたりバスを使ったりする。昨日は嵐の兆候がみられたため、たまたま徒歩だったが…。

明音は時計をみると、深い溜め息をついた。そしてテーブルの上に無造作に置かれた煙草に火をつけた。

いつの間にか寝たわりには、眠りは浅かった気がする。というより、

たくさんの夢を見たせいで、余計に疲れがたまっている感じである。  
しかもかなりリアルな夢。昔の思い出。

昨日の切なさや明音にその夢を見させたのだろう。それにより、余計にふりほどけない柵となって、明音を強く縛りつけていた。

明音は一服吹い終わると、またソファに寝転んだ。

明日は休みかあ…。

ボーッとしていると、なんだか吐気と強い頭痛に襲われた。風邪！？とも思ったが、それとは違うことは明音自身よくわかっていた。極度の不安や苦痛、切なさや愛しさ、色んな感情が沸き起こり、精神的に不安定になると、明音はいつもこうなるのである。

そして、対象がわからない何かに対して「どうしよう…」と脅えるのである。

今日は仕事を休もう。

休んで整理しよう。

部屋も気持ちも何もかも。

そう決意すると、明音は店長に電話をかけた。  
何があっても無遅刻無欠勤だった明音の突然の欠勤希望に、店長は異常なほど心配してくれた。

「大丈夫か？なんか届けるか？薬とか食べ物とか…」

「いえ、大丈夫です。ただ疲れがたまっているのかもしれない。明日も休みなのでゆっくり治します。」

「そうか…わかった。お大事にね。」

「ほんとすみません。ありがとうございます。」

そんなやりとりをし、電話を切ろうとしたその時、

「明音ちゃん、絶対戻ってきてな。明音ちゃんはうちの店に必要なんだから。」と店長が最後に付け加えた。

明音は店長のその優しさが嬉しかったが、正直に喜べない自分がいて、聞かなかったふりをして無言で電話を切った。

ごめんね、店長。

明音は正直もうこの仕事も潮時かなと感じ始めていた。

自分より若い子がたくさん増え、いつの間にか年輩になってしまった自分は、若い子に嫌がられ、怖がられ、一定の距離を置かれた存在になっている。一目置かれた存在だった昔の自分は、今じゃ壁を隔てられた孤立した存在に様変わりしていた。

店長は全てわかっていた。若い子の気持ちも明音の気持ちも。

その上で、明音を必要としてくれているのである。

でも明音はそろそろ限界だった。過去の栄光に縛られている自分も嫌だったが、それを打ち破るのもプライドが許さなかった。

そのため溝は埋まるどころか深まる一方で、もう成す術が見当たらないのである。

こんなにがむしゃらにこの仕事に打ち込み、固くなにプライドを守ってきたのは、

『お前は素晴らしい店員になる素質がある。みんなに幸せを与えられる魅力がある』

という信吾の言葉があるから。

でもごめん。

わたしにはそんな素質なかった。

わたしのやり方は間違っていたのかもしれない。

信吾の期待に応えられなかった。

明音は心の中でそう呟き、とりあえず身のまわりの全てを整理しようとした。

片付けよう。

そして家も引越そう。

仕事も探そう。

そう決意して、まず散らばっているゴミの片づけから始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1931d/>

---

夏の魔法

2010年12月17日14時13分発行